

---

# オトギバナシ

魅華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オトギバナシ

### 【Nコード】

N3117I

### 【作者名】

魅華

### 【あらすじ】

ネットで出会った男の子は、大好きなアイドル……  
二人はまるで、おとぎ話のような恋に落ちる

## プロローグ

登場人物

華（18）

フツの女子高生。

大人気アイドルグループのメンバーである、「リュウ」の大ファン

リュウ（20）

10代を中心に人気のアイドルグループのメンバー

恋愛ができないアイドルという仕事に嫌気がさし、ネットのコミュニティサイトで出会いを探す……

突然

そんなこと、あるわけない……

その話の発端は、ネットのコミュニティーサイトで絡んでる男の子の一言。

「俺、実はアイドルやってんの」

「ふーん……」

そんなウソ、ネット上なんだしいくらでもつけるじゃん？

第一、ホントに男の子なのかもわからないし？

そう思った私は、その発言を適当に流す。

「俺、来週テレビ出るから見てよ!!」

「テレビ?? 案外すごいんだ。何の番組なの？」

もちろん私は、信じているわけじゃない。

あくまで話に「のってあげた」だけだし。

「信じてもらえないみたいだね。そりゃそうだよね。じゃあさ、俺、華に、分かるように、テレビで合図するからな」

「え??」

「曲が終わった時、は・なって口パクしてピースすっから〜」

「わかった。楽しみにしてる……」

やれるもんならやってみな。そう思ってた。  
だけど、彼の言った事はホントだった

## 突然（後書き）

デビュー作です。

べたな話かもしれないし、  
まだまだわかんないことだらけだけど、  
頑張ります

## 真実

私は、自称「アイドル」に教えられた番組を、半信半疑で見ている。

ってか、それ目当てじゃないし。

ちょうどその放送には私の大好きな、「リュウ」くんもでるから、どっちかといえばそれ目当て

ってか、リュウくんメインだし

ってか、なんか芸名もなんも教えてもらってない。

彼いわく

「それは秘密だし」

だって。まあどーせうそだよね^|^;

番組が始まる

「やっぱりリュウくんはかっこいいわ〜」

「世界一だよ！この世の人間じゃないよ！かっこよすぎて」

いつもの私のお決まりのヒトリゴト・・・

その瞬間は突然やってきた

「は・な」

大好きなリュウくんが、私の名前を口パクしてきた

「うそでしょ????絶対ウソ!!ありえないもんこんなこと〜  
〜!!!」

だけど、リュウくんはたしかに私の名前を口パクして、ピースもし

てきた・・・

「.....」



## 激変

騒動の後、私は早速彼にメール。  
なにが起こったか、信じられないよ  
夢としか思えないことが、こうして現実の世界で起きてる。

「信じてもらえた??」  
返事の第一声だった。

「信じられないけど、一応」

そういえば私たちは数日前、こんなやりとりをしていた。

「華ってさー、好きな芸能人とか居んの??」

「んー?まあいるけど・・・」

と、この後、私はバカ正直にリュウくんの大ファンであることを教えてしまった。

もちろん、携帯画面の向こうに、その張本人がいることなんか想像もせずに。

「オレさ、あのメールの後、やった! って思ったの」

「え〜・・・(^^) 恥ずかしい・・・」

それまで、クールな文体を装ってきた私のメールが、一気に変わる。

ホントに、こんなこと・・・

信じたけど、私みたいなフツの凡人に、あってもいいことなのか  
な・・・



## 秘密

その日から私は、大人気アイドルとメル友であるという、重大な秘密を持つことになった。

未だに信じられない感がある

数日後、彼からこんなメールが来た。」

「オレさ、アイドル辞めたい」

「え?????」

「だから、辞めたいつつつてんの!」

突然すぎるメールに、ただただびっくりするばかりだった

「なんで????なんで????」

「恋できないし、普通に街も歩けない。普通にひよこひよこ出歩いてたら、パパラッチのカメラにやられるし……」

「そっか……。辛いよね……。でもねリユウくん、ファンの存在って、意識したことある??」

「え?????」

## 存在

「そりゃ、しってるよ。ファンがいなきゃ俺ら成り立ってねえし」

「じゃあ・・・じゃあ、なんでそんなこと軽々しくいえるわけ??？」

わたしは、怒りでついつい文体が荒くなる。

「え????」

「リュウくん existence に、笑顔に、歌に、どれだけの人が元気もらってると思ってるの？リュウくんが今ここで辞めたら、どれだけの人がすつごく落ち込むとおもってるの??」

自分が大ファンであるだけに、ついつい説得にも熱が入ってしまった。

「リュウくんさ、病気で休んだことあったでしょ。3ヶ月だけ。あの時、私、ただただ心配になって、目の前が真っ暗になって、なんか心に大きな穴が空いた感じだった。病気がいつ治るとか、いつまた仕事復帰するとか、具体的なこと何にも発表されてなくて、またあの笑顔をテレビで見れるのかすらわかんなかったし、もうこれで戻ってこないんじゃないか。って考えたこと、何回もあった。

具体的なことが発表されて無いだけに、週刊誌とかは好き勝手に書くし、ホントに毎日ぼーんって、孤独感しかなかったもん。

辞めるとか引退とか、そんなことばかり言われてて、病気自体ウソなんじゃないかって言ってる人もいた。

だけど私はそんなこと思わなかったよ。

リュウくんが、心底、本当に、どうしようもないぐらい大スキだから

絶対に信じようって決めてたの「

## 想い

私の怒りのメール以来、リュウくんの返事は、ぴたりと止まった。

「堪えたかなあ……」

そう感じた時だった。

久しぶり携帯のにサブディスプレイが光る。

「俺が悪かった。」

その一文に、とてつもない何かを感じた

## 愛

「いいよいいよ。辞めたくもなるよねそりゃあ」

「わかってくれる?」

「うん。分かる。すごい分かるよ。好きな人の気持ちって、何倍も分かるもん。」

「華?」

「何?」

「好きだ。会いたい」

「え?.....」

## 密愛

「でも…パパラッチ…」

「大丈夫でしょ。てか彼女いないとダメだわ俺」

「追っかけとかは？」

「時間差攻撃」

「え？」

「2人別々に入る」

このあとも、長々と2人の計画が話し合われ、ついに会う日と場所が決まった。

「あーもう死にそうだよ…」

しばらくすると、見慣れない男が近づいてきた。

「華？俺だよ？」



## 素顔

「え？」

振り返ると、そこにはリュウがいた。

バレないようにと、ダテメガネをかけ、ニット帽を被り、おまけに髪型までウィッグとエクステとをアレンジしたその日限りの髪型の彼は、テレビ画面のなかで輝くアイドルとはまるで別人だった。アイドルとの共通項と言えば声ぐらい…

「じゃあ、俺先入ってる」

そう言っただけは、個室を取って予約していた店の中に入って行っただけ。しばらくして、私もそこに入る。

個室の戸が閉まったのを確認して、彼はバレないようにと準備してきた武装を解く。

「本当にリュウくん？」

「目の前に居るのに信じてくれない？」

「そうじゃなく、なんか夢みたい」

「俺の直感、間違っただけだったわ」

「え？」

## 発展

「やっぱり。」

「何が？」

「メールでも、感覚的に、あ、こいついいやつ。みたいなの。わかるの」

「さすがアイドル。セールストーク、うまいんだね」

「そんなつもりで言ったんじゃない…俺ガチだよ？」

リュウくと、こうしてつながりをもてた事が嬉しい反面、テレビ画面から見えない素の部分を知っていくことに、なぜか少し怖さを感じていた。

## 仮面

でも、怖さより、「仮面」を剥いでその下を見れるというワクワク感の方が断然勝ってたんだけどね。

てくてくてく…

店員の足音。

すかさず、ウィッグをつけて、あっという間に別人になるリュウくん。

「失礼します。ハンバーグセットになります。」

「どーも」

「すごい早業！びっくりしたよ私」

「なんか体が覚えてる」

「食べよっか( ^o^ )」

無邪気な笑顔で子供みたいに言うリュウくん。

テレビのリユウくんは、どちらかと言えばクールだったので、ちょっと意外。

「あ、びっくりした？テレビも意外と大変なんだよ。キャラづくり。( ^o^ )」

キャラづくりの一言が、妙に引掛かり、胸が締め付けられた。

## 疑問

「ホントに、これでいいのかなあ…」

私は、リュウくんという間、その疑問で頭がいっぱいだっただ。

「リュウくんって、どんな人なんだろう？」

私は、アイドルとしてのリュウくんのファンとしては一流だと思ってる。

けど、私が好きなのは、アイドルの仮面をかぶったリュウくん…  
芸能人はほとんどの人間が、素顔の下に仮面を被って、スポットライトを浴びている。

その仮面を外せば、どんな顔を見る事になるかなんてわからない。  
腹黒い顔が出てくるかも知れないし、アイドルと何らかわらない顔  
を見る事になるのかもしれない…

## 特別

「今度のコンサートのチケットって、もう取った？」

「いや。まだ」

「じゃあこれあげる。いわゆる、コネチケ？（＾Ｏ＾）」

「え……」

「あと、これ、関係者用の立ち入り禁止場所の通行パス。楽屋とかも、これに入れるから（＾Ｏ＾）」

「そんな……」

私は、あまりに特別すぎる境遇に、ただただびっくりしていた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3117i/>

---

オトギバナシ

2011年1月8日03時21分発行